

平成28年12月3日(土) / 岐阜県岐阜市・じゅうろくプラザ2Fホール

大規模災害に備えて ～助け合える地域づくりを～

平成28年度の「社会貢献フォーラム」は、岐阜県岐阜市で開催された。第一部ではアルピニストとして活躍するかたわら、国内外での環境保護活動やネパール大震災の被災者支援活動などに取り組む野口健さんの講演、第二部では岐阜県内で行われている社会貢献活動の事例を見ながら、社会貢献活動の意義、大規模災害に備えるための地域づくりなどについて、パネリストが意見を発表。会場に詰めかけた約300名の市民が熱心に耳を傾けた。フォーラム終了後には、野口健さんのサイン入りグッズが当たる抽選会も行われた。

主催：

全日本社会貢献団体機構、岐阜新聞・ぎふチャン、全国地方新聞社連合会

協力：

清流の国ぎふ 防災・減災センター

後援：

岐阜県、岐阜県教育委員会、岐阜市、岐阜市教育委員会、岐阜大学、NHK 岐阜放送局、共同通信社、全日本遊技事業協同組合連合会、岐阜県遊技業協同組合



第一部 講演

一人ひとりができること

野口 健さん(アルピニスト)

東日本大震災が起きたとき、僕は羽田空港で青森行きの飛行機を待っていました。空港内のテレビを見ると、ヘリコプターから撮った津波が次々と家や街を飲み込んでいく映像が流れていて、あまりのインパクトの大きさに、「一体、何が起きているのだろう?」と一瞬、きょとんとしてしまいました。

それから3日間ほど、テレビの映像を見続けたが、自分が被災したわけでもないのに、気持ちが落ち込んでしまう。しかし、そこで、「自分にできることは何だ?」と頭の中のチャンネルを切り替えた。避難所で薄い毛布にくるまって寒さに震えている映像を見たとき、僕は山をやっている人間なので、寝袋を届けることを思いついた。寝袋はコンパクトでも、自分の体温で温かくなる。

そのことをツイッターでつぶやくと、日本はもとより、アメリカ、フランス、中国などから続々と寝袋が事務所に送られてきた。それを届けるために、陸前高田市などの東北の被災地を回りました。

2015年4月には、ネパールで81年ぶりという大地震が起きた。ちょうどヒマラヤを登山していて、エベレストのベース

キャンプに向かう途中で、「ズンッ」という大きな衝撃を受けて、ひっくり返った。山の上からは、巨岩や巨石、氷の塊などがガンガン降ってくる。あわてて大きな岩陰に隠れ、難を逃れました。

シェルパの人たちが住む村里へ何とか下山したが、月の光の下で見る村は壊滅状態。つぶれた家の外にポーツと立っている村人も、ショックのあまり、声も出ないという状態でした。その後も余震や雪崩が続き、他の登山隊が帰っていくなか、僕はカメラやパソコンなどの放送機材を持っていたので、現地の被害状況を伝えようと、エベレスト街道にあるシェルパの村々を回りました。

現地で「ヒマラヤ大震災基金」を立ち上げると、あっという間に6,000万円が集まり、最終的には1億円を超えた。まずは、家を失った村人たちが安心して寝られる場所を確保するために、集まった基金で大型 TENT を大量に製造してもらい、それを届けました。現地ではいま、壊れた家の補修が終わり、学校やお寺などの修築にかかっている段階です。

すると今度は、熊本地震が起きた。正直に言えば、ネパールでの活動もあったので、こっちはタッチしなくてもいいという気持ちでした。ところが、ネパールで支援した人たちから、「あとき日本中の人に助けられた。恩返しをしたい」という電話があった。しかも、たどたどしい日本語で「恩返し」と言う。これは日本人が最も大切にしている心のはず。シェルパの人からその言葉を聞き、頭をガーンと殴られたような感じがした。「もう逃げられないぞ」、そんな気持ちになりました。

車中泊の人が多いというテレビの報道を見て、ヒマラヤ登山のベースキャンプを再現しようと、TENT村の開設を思

い立った。TENTは雨風がしのげるし、ある程度のプライバシーを確保できる。そのことをツイートしたら、事務所が埋まるほどのTENTが届いたので、160張りのTENTで運動公園にTENT村を設営しました。

そうした経験から、大規模災害時の避難所の形態として、今後はTENTを考えてもいいと思う。日本は自力で3日間生き延びれば、何とか助けが来てくれる国。そのためにも、これからは「一家にTENT1張、一人に寝袋1個」を準備しておいたほうがいい。特に子どもたちにはアウトドア体験などを通じて、TENTになじんでおくことをおすすめしたい。



第二部 フォーラム

岐阜県内で行われている社会貢献活動の事例

加藤さん 日本は自然災害が多い国ですが、そのときに地域での助け合いが重要になります。災害時の対応を含め、よりよい社会づくりのために、ボランティアや企業・団体による社会貢献活動の果たす役割が非常に大切になりつつありますが、今回のフォーラムでは県内で行われている様々な社会貢献活動の事例を見ながら、パネリストの方々

の意見を交えつつ、社会貢献活動の持つ力や可能性について、みなさんと一緒に考えていきたいと思います。まずは、「岐阜大学 学生保安消防隊」として活動している2名の学生からお話をうかがいます。

加納さん 私たちは、「自分たちの大学は自分たちで守る」をスローガンに、学内や学外で防災のボランティア活動をしている学生サークル団体です。2015年は、岐阜駅前前で「3・11防災イベント」を実施し、防災グッズ紹介、トークショー、AED体験などを行いました。また、岐大祭では200人が参加し、自分たちの大学の一時避難場所を回り、防災クイズなどを行う「防災ウォークラリー」などの活動をしました。

佐藤さん 同じく昨年7月には、大学生の防災意識を高める目的で、「防災女子カフェ」を3日間開催しました。1日目はアルファ米などの保存食の試食、2日目は手ぬぐいを活用した応急処置の仕方、3日目は電気、ガス、水道など



一川 哲志さん
岐阜新聞社編集局
論説委員長

1959年、岐阜市出身。立命館大学産業社会学部卒業。81年岐阜新聞社に入社。本社編集局の記者として司法、行政、運動などを担当後、東京支社編集部長、東濃総局編集部長、東濃加茂総局長などを経て編集局デスクを務める。2014年に論説委員となり、15年から現職。

加藤 義久さん
コーディネーター
ぎふチャンアナウンサー

1971年、岐阜市出身。南山大学法学部卒業。94年岐阜放送に入社。報道制作局報道部、制作部を経て、再び報道部へ。夕方情報ワイド番組「Station!」のキャスターをはじめ、サッカーJ2のFC岐阜や高校野球などのスポーツ中継、選挙特番などを幅広く担当。

加納 一輝さん
岐阜大学大学院 2年

佐藤 衣莉さん
岐阜大学 3年



野口 健さん
アルピニスト

1973年、アメリカ・ボストン生まれ。99年、エベレストの登山に成功し、当時の7大陸最高峰世界最年少登山記録を25歳で樹立した。2000年からエベレストや富士山での清掃登山を開始。以後、「野口健・環境学校」を開校するなど、環境問題への取り組みを行っている。

高木 朗義さん
岐阜大学工学部教授

1963年、名古屋市出身。岐阜大学工学部卒業。2006年から現職。岐阜大学地域防災研究センター副センター長、清流の国ぎふ防災・減災センター減災社会推進担当も務める。経産省・日経新聞社会人基礎力育成グランプリ奨励賞、地域仕事づくりチャレンジ大賞奨励賞などを受賞。

大野 春光さん
岐阜県遊技業協同組合理事長

1957年、岐阜市出身。慶應義塾大学経済学部卒業。博報堂を経て、82年大野春堂に入社。96年同社取締役役に就任。長良川ボウリングセンター代表取締役も務める。94年岐阜青年会議所理事長。全日本遊技事業協同組合連合会副理事長。全日本社会貢献団体機構副理事長。

が使えない災害時のような状況での3日間の献立づくりを学びました。今後もより多くの学生に防災に関心を持ってもらえるよう、楽しさを取り入れた防災の取り組みを行っていきたくと考えています。

野口さん 若い人がこういう活動をする事で、防災に対する敷居が低くなる。アルファ米などの保存食はアウトドアでも食べる機会があるが、意外とおいしい。震災が起きてからあわてて用意するのではなく、震災前の準備が大事。彼らの活動は、具体的でいいですね。

大野さん 私からは、岐阜県遊技業協同組合や傘下の支部組合が取り組んでいる社会貢献活動の事例を紹介します。大規模災害に際しては、全日本遊技事業協同組合連合会を通じて義援金を寄付しているほか、例えば東日本大震災では、県内の12ホールが東松島市や陸前高田市の瓦礫撤去や清掃などの復興ボランティア活動に参加しました。また、毎年、5,000万円程度を社会貢献事業

のために拠出しています。継続的な活動としては、岐阜県の「愛のともじり基金」への寄付、「緑の山再生プロジェクト」の支援、老人介護施設などに移動式のパチンコ台を持ち込んで行う「あいぱちプロジェクト」の実施、防犯ブザーや防犯カメラの寄贈などがあります。単年度のものとしては、情報科学芸術大学院大学の新入生へのiPadの寄贈、岐阜柳ヶ瀬お化け屋敷「恐怖の細道」への資金提供などがありました。

一川さん 東日本大震災をきっかけに、終末期にある人に宗教の立場から心理面での寄り添いを行う臨床宗教師というものが誕生しましたが、大垣市でも病院が開設した喫茶店「カフェ・デ・モンク」で臨床宗教師が活動しています。また、子どもの貧困支援や食品ロス対策として、企業などから規格外や売れない食品を譲り受けて分配するフードバンクという活動がありますが、岐阜県内でも行われています。

社会貢献活動と地域防災のための地域づくり

加藤さん 社会貢献活動の現場で、困難にぶつかったり、失敗した経験、あるいは逆にうれしかったこと、感動した経験などを教えてください。

加納さん 防災ボランティア活動を通じて学んだのは、自分一人の力は小さいということ、人は心で動くものだという事です。「防災は重要」という気持ちが100人のうち、一人でも伝われば、いつか社会が変わっていくのではないかと考えられるようになりました。

野口さん なかなかすぐには伝わらないもの。16年前に始めた富士山の清掃キャンペーンも、最初の4年ぐらいは

参加者が100人程度だった。ところが今は7,000人くらい集まるようになった。環境の「環」は、読み方を変えると「輪」になる。人と人の輪が広がることが大事。そのためにも継続することが大切です。

大野さん 社会貢献活動をやっている一番、充実感を覚えるのは、相手の顔が見え、コミュニケーションがとれたとき。それが次の活動への活力になる。また、我々のような業界団体は、活動の意思決定が迅速にできる。県のような行政単位ではスピーディな対応ができない。

野口さん 震災時は特に、スピードがすべて。そのため



には地元の首長の決断が鍵を握っています。

一川さん 首長がどれだけイメージを描けるかということ。それをサポートする人がまわりについて、さらに民間が後押しする形がいい。

高木さん 災害時は、行政だけの対応では無理がある。行政側は、できないことはできないと手を挙げたほうがいい。すると、ボランティアや社会が助けてくれる。社会貢献活動は出会いや交流を通じて、自分も周囲の人間も成長したり、変わっていくきっかけになる。その意味で、社会貢献活動は社会をよくすることにとどまらず、人づくりや地域づくりにも貢献します。

加藤さん 防災の基本について、改めて高木教授からご説明していただきたいのですが。

高木さん まずは「自助」が大切です。自分の身は自分で守ること。そして他人事としての「わかる」から、自分事としての「できる」になっていかないと被害を減らすことができない。さらに「共助」が必要。災害を大きな共通の敵と捉え、社会全体でそれに打ち勝つために、自分たちの地域をみんなで守るという意識を持つことが大事です。そのためには、お互い様の気持ちを持って、お節介と言われるくらいでちょうどいい。

野口さん 被災地では行政自身も被災している。だからボランティアとどれだけ連携できるかが大事だが、他地域の行政マンの協力も重要。熊本地震で益城町に設営したテント村では、岡山県総社市の市長や職員が協力してくれたので非常に活動しやすかった。

大野さん 地域づくりに関して、私たちの業界では全国的に防犯に力を入れています。岐阜市においては岐阜駅から柳ヶ瀬までに防犯カメラの設置を進めています。景気にかかわらず、こうした活動を継続することで、住みやすい地域づくりのお手伝いをできればいい。

高木さん 社会貢献活動は、地域防災だけでなく、地域をつくっていく無限の可能性がある。非日常としての防災、日常としての防犯を上手につなげていければいい。いずれにしろ、地域づくりは一人の力ではできないこと。いろいろな人がかかわることで、点から線、線から面になっていくことを期待します。

野口さん 人間は、なかなか危機感を維持できない。つい、「自分だけは被災しない」、「自分は大丈夫」と思ってしまう。災害が起きるたびに、自分が被災するイメージを持つことが大切だと思います。

加藤さん みなさん、今日はありがとうございました。

公平性、公共性などに配慮しながら 地域防災や地域防犯に協力していく

岐阜県遊技業協同組合理事長 大野春光さん

野口健さんの存在感や勢いに圧倒されるとともに、災害時の避難所としてテントを活用する話に感心しました。今後は災害用の備蓄品としてテントの準備も考慮したほうがいいと思います。岐阜県は、木曾川・長良川・揖斐川の「木曾三川」の氾濫に悩まされてきた土地柄です。そうした災害の歴史を今後の防災教育に取り入れていくことも必要だと感じました。岐阜県遊技業協同組合として、今後も公平性の確保を図りながら、防犯カメラの設置による地域防犯への協力など、公共性の高い社会貢献活動に継続的に取り組んでいきたいと考えています。

